## CDの玉手箱 ⑬⑤

# 新譜試聴記　飯森豊水

ジャック・デュフリ：クラヴサン曲集

**濱田あや**（クラヴサン）

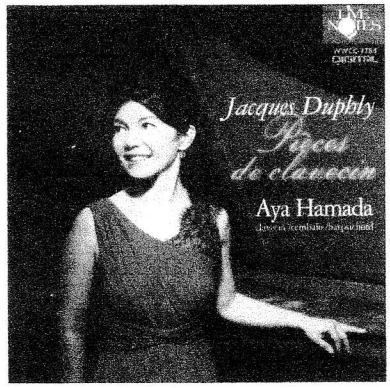
ライヴノーツ　WWCC-7784

ここに聴く作品はロココ時代の作曲家ジャック・デュフリ（1715−89）の作品ばかり。デュフリのクラヴサン音楽は、繊細で、優美で、儚いといったイメージをもつ人が多いだろう。演奏技術的にはさして高度ではないのだろうが、演奏して聴き手を満足させるのは容易ではなさそうだ。つまりそこで表現されるのは紛れもないロココの貴族趣味に彩られたもので、これはたとえ演奏家がフランス的な感性や繊細さを具えていても、その世界観や生活感に対する理解が浅いと説得力ある演奏は難しいのではないか。

濱田あやは、なかなか得がたい幸運に恵まれながらこのデュフリに挑戦している。彼女が演奏しているのは、レオンハルトが没年の2012年まで愛奏し何枚ものディスクを録音したという名器だ。このたび、レオンハルトの没後初めて録音用に提供され、使用できることになったのだという（18世紀の鍵盤楽器製作者ルフェーブルの名を冠する、実は現代ドイツ製作者スコヴロネックの手になるこの楽器の由来や人騒がせで愉快なエピソードについては、濱田自身のライナーノーツをご参照いただきたい）。

このディスクは濱田のソロ・デビュー盤でもあるという。ニューヨーク在住の彼女は、これまで数々のコンクールで輝かしい実績をあげ、クリスティ、サヴァール、ホグウッド、ピケット、鈴木雅明といった錚々たる音楽家たちと共演してきた。その彼女が「（この楽器）から繰り出される、明瞭かつ豊かな音色、高貴な響きに最も相応しいのはデュフリの作品」と確信した結果、このディスクが誕生したのだという。ここではデュフリのクラヴサン独奏曲全46曲から14曲が選ばれている。

さて、濱田の演奏だが、かなりユニークなものだ。これほど攻撃的にデュフリの作品が演奏できるものとは予想できなかった。濱田は、まずは分析的で知的で、人並み外れた構築性をもつ演奏家




なのだろうが、一方で、１曲ごとに驚くほど多彩なニュアンスをもたらす才にも恵まれていて、その「引き出し」の多さと、引き出しの使い方の的確さには熟達の名人を思わせるものがある。個々の音やフレーズは一切の曖昧さがなく、彼女の明晰な意思を伝えていくが、それらは細部まで考え抜かれていて隙がなく、知的にも音楽的にも説得力がある。このディスクは、デュフリは初めてという聴き手には曖昧さのない明確な作曲家像を与えるだろうし、他方、いくらかでもこの作曲家に経験のある聴き手には、良い意味で予想を裏切り続けて、「なるほど」、「そう来たか！」と驚かせ、しかも説得し続けていくことだろう。

これを具体的に説明していきたいところだが、技があまりに多彩なので個別に説明することは不可能だし、しかもニュアンスがあまりに繊細なので言葉にするのが難しい。

例えば、クラヴサン曲集第３集に収録されている《シャコンヌ》。これはヘ長調→ヘ短調→ヘ長調という３部分から構成されるが、これらの３部分の間には大きな対比が与えられ、長調の部分では力強い明晰さの中で、フレーズのまとまりごとに異なるニュアンスを与えられていく。他方、短調になると一転して左右の手のリズムをずらしながらためらうような表情をつけて、ここでもまとまりごとに異なる表情を与えていく。長調に戻るとその仕組みが見えてきて、あたかも感性的かつ知的な冒険に旅出ているような錯覚に陥った。

この間、聴き手は、先が読めないほどに濱田の表現の幅の広さに驚かされながら、聴き終えた時にはすっかり説得されている。それが満足でもあり、まんまと濱田の掌の上で踊らされたようで悔しくもある。彼女のようにアイディアが多いと聴き手も次は何をするかと構えてしまいがちだ。だから、「優しく」と指示された《三美神》を普通に優美で物憂げに弾いてしまうと、それが普通であることでまた驚いてしまう。彼女に大胆にして老獪でもある「業師（わざし）」の姿を見た。